

古代因幡における土器・陶磁器の移動

八峠 興

要旨

因幡地域へもたらされた古代の土器や陶磁器をみると、9世紀から11世紀後半の鎌倉時代以前にも道を介して物が移動していた。主なものは手づくね成形の土師器皿や黒色土器、緑釉・灰釉陶器、他地域産の須恵器などがあり、生産地は播磨周辺、畿内、京都やその周辺、近江、東海など広範囲に及ぶ。これまでは僅かな出土で公的な施設が想定されてきたが、点数のほか器種や組み合わせなど、遺跡の立地や遺構の性格とともに評価する必要があることが明らかになりつつある。

因幡地域では搬入品の多くは国衙を結ぶ官道や郡衙を結ぶ伝路沿い、国衙や郡衙周辺、日本海を結ぶ海路沿いなどに分布する。国府以外で搬入品が多く出土する青谷横木遺跡では、搬入品の出土する調査区で異なるため、分布から主要な施設の位置を推測することができる。

はじめに

鳥取西道路の発掘調査の成果の一つに青谷横木遺跡の古代山陰道の発見がある。この調査では道路遺構の立地や遺構の構造が明らかとなり、東西に延びるルートも特定されつつある。では、この道を介してどのように物が動いていたのか。

解明する手がかりの一つとして発掘調査で出土した土器や陶磁器がある。多くは地元で作られた土器であるが、他の地域で作られたものもある。こうした搬入品の作られた地域や時期を特定することで、因幡地域における土器や陶磁器の移動について知ることができる。今回は9世紀から11世紀にかけて他の地域で作られた土器や陶磁器を搬入品として扱い、主要遺跡や古代交通との関係について検討する。

1 古代の土器に関わる文献史料

(1) 延喜式

古代の土器は、律令的土器様式といわれるように、器の種類や大きさについての細かく決められていた。それが具体的に記されているのは『延喜式』である。

『延喜式』は延喜五（905）年に編纂を開始、康保四（967）年に施行した律令の規則で、儀礼に用いられる器についても細かな決まり事がある。これによると、器は器種や寸（約3cm）単位の法量により食器や酒器、容器などに分けられ、階層により使う器の素材が異なること、儀式に使う器の数や種類など決められていた。上位に当るのは金・銀などのいわゆる金属器、次に朱漆の漆器、さらに黒色漆の漆器である。土器は黒色漆の漆器と同じか、さらにその下の階層となる。下位の器について詳細な記載はないが、断片的な記述などから推測すると、上位には磁器や陶器、次に須恵器、さらに土師器となる。

(2) 時範記

京都から因幡まで国司として赴任した平時範の日記がある。承徳三（1099）年の二月から三月に都から因幡国府に赴任した行程が詳細に記されている。これによると二月九日に出発して十五日まで七日を擁して因幡国府に到着している。ルートは現在の武庫川や明石などの山陽方面から佐用

史料1 『延喜式』の記述（抜粋）

No.	延喜式	箇所	器についての記載（抜粋） ※一寸＝2.97cm＝10分（和同六年制）
1	卷第二十四	主計上 1	凡そ左右京・五畿内の国の調、…土師の器は、…酒盞・汁漬の杯は各二十合＜各口径五寸、五合を受く＞、中片杯七十五口＜径六寸、四合を受く＞、吐盤三口＜径一尺八寸＞。杯作土師の酒盞六十合＜径五寸＞、小高盤四十八口＜高さ五寸、径六寸＞、中片杯一百九十九口＜径六寸＞。…
2	卷第二十四	主計上 51	播磨国…調、…様の管坏・凡の坏各八十口、椀五百五十合、片椀百五十二口、…椀の下盤五十口、深杯五十九口…
3	卷第二十四	主計上 62	讃岐国…調、…埴四十口、麻笥盤五十口、大盤十二合、大高盤十二口、椀の下盤四十口、椀三百四十口、…
4	卷第三十二	大膳職上 7	饗宴の雑給…その雑の器は新王已下三位已上は朱漆、四位已下五位已上は烏漆ならびに土の器。
5	卷第三十九	内膳司 24	供御の料の雑の器…金・銀・朱漆・瓷の雑の器。

史料2 『時範記』の記述（抜粋） 承徳三（1099）年二月

九日：向山城…。十日：摂州武庫郡…。十一日：明石駅家、…。
 十二日：高草駅家、…。十三日：佐余、…。十四日：美作国境根
 仮屋…。十五日：越鹿跡御坂、未出峯下馬、立峯上、西面、官人
 以下立峯下、南面、先是神宝前行、事相従…。已尅至于智頭郡駅
 家、簾中居饌、先食餅、先啜粥、…入夜着惣社西仮屋、…。

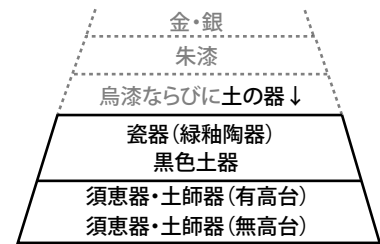


図1 『延喜式』にみる器の階層

を經由して中国山地、志戸坂峠を越えて智頭から北上して国府に向かう。峠越えの際には馬から降りて迎えの官人と面会する儀式を行い、その後智頭郡の駅屋で饗宴を受けている。

雪の多い冬季のみの迂回路かもしれないが、いずれにせよ正規の山陰道を使用していないことは、都でも地元の官人も共通認識していたことが分かる。

2 移動する土器・陶磁器

(1) 手づくね土師器

儀礼に用いられる小皿の登場は、全国的に10から11世紀である。因幡地域では須恵器と同様に回転台で成形するが、京都など畿内では手づくね成形である。古代の手づくね土器が出土したのは青谷横木遺跡と会下・郡家遺跡で、都で使用されたのと同じ「て」の字状口縁部をもつ。手づくね成形の中にも技量や胎土による差があり、京都域内よりも畿内など周辺域のものとみられる。

(2) 黒色土器

土器を煤で燻し、工具による磨きで吸着させた土器を指す。因幡地域では内面を磨く内黒黒色土器が主である。成形方法は回転台成形と手づくね成形がある。在地では回転台成形しか行わないため、手づくね成形のものは搬入品であろう。青谷横木遺跡、会下・郡家遺跡、岩吉遺跡、高住平田遺跡で出土している。高住平田遺跡のものは10世紀代に北摂地域で作られた可能性があるとして報告している。ほか、回転台成形や内面を黒色処理する甕の多くは在地生産とみられる。

(3) 施釉陶器（緑釉陶器）

在地では生産されていないため、全て他地域からの搬入品である。生産地は京都・東海・近江・防長がある。因幡地域全体でみると、京都産の緑釉陶器が大半で、続いて古い段階では猿投などの東海産、新しいものでは近江産が出土する。防長産の緑釉陶器はほぼ確認できない。20点以上出土しているのは因幡国府、岩吉遺跡、会下・郡家遺跡、青谷横木遺跡がある。青谷横木遺跡では10世紀代の京都近郊の篠窯のものが主体を占める。ほかの遺跡では9世紀から10世紀にかけて

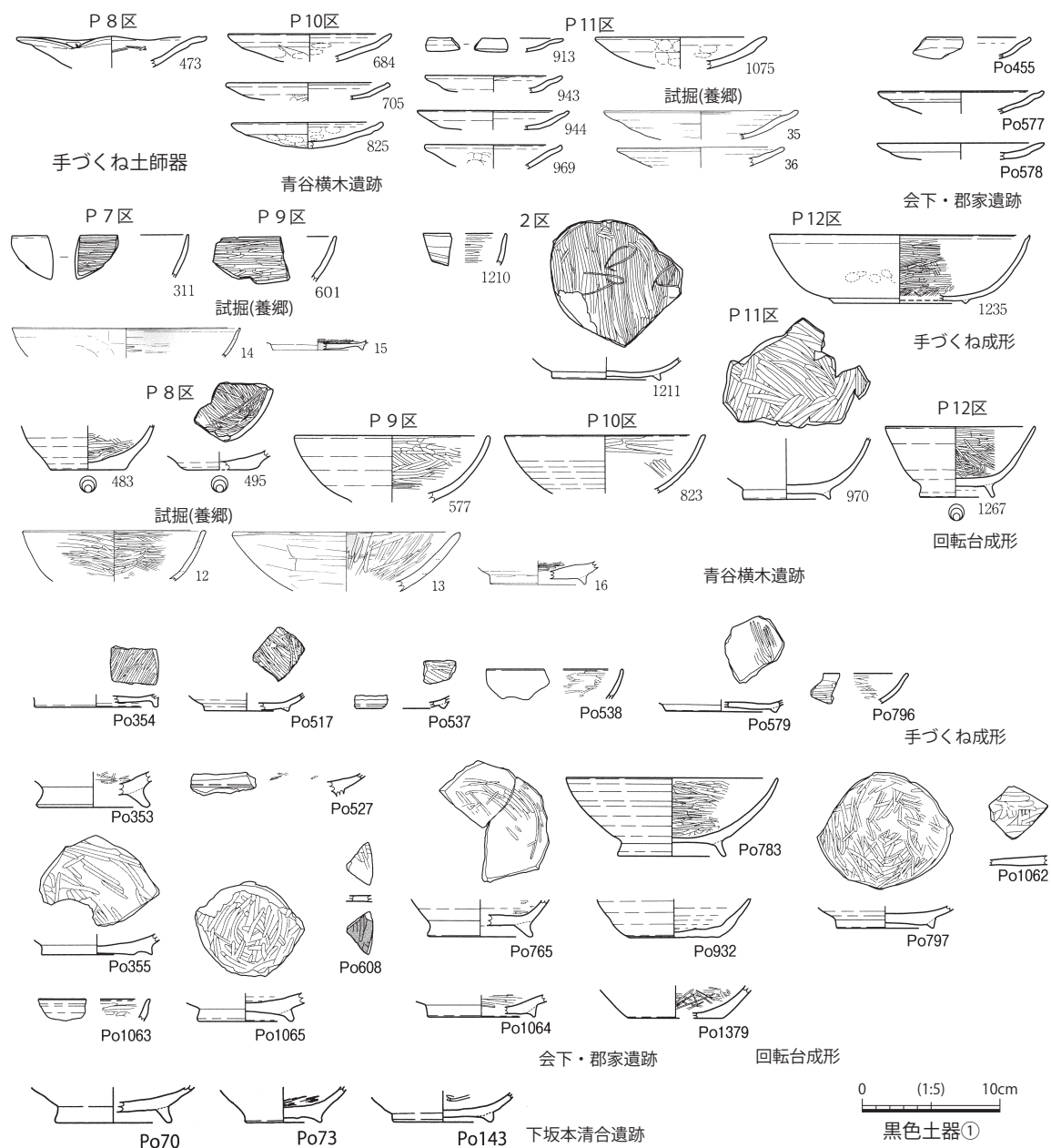


図2 手づくね土師器・黒色土器①

京都や東海から京都や近江主体へと変化する。これは防長周辺を除く西日本の一般的な傾向と同様である。これまでは数点の出土で役所や寺院などの主要施設が想定されてきたが、出土の有無のみで判断するだけでは十分ではない。出土点数や内容、碗皿類よりも壺類など、上位にあたる器種のものがいかに多く出ているかで評価していく必要がある。

(4) 施釉陶器（灰釉陶器）

東日本を中心に西日本での出土は多くない因幡地域の中では会下・郡家遺跡から 20 点以上出土しているものの、理由は明らかではない。青谷横木遺跡では可能性のある小片が数点ある。

(5) その他の陶磁器

奈良三彩は古市遺跡で出土が確認されている。

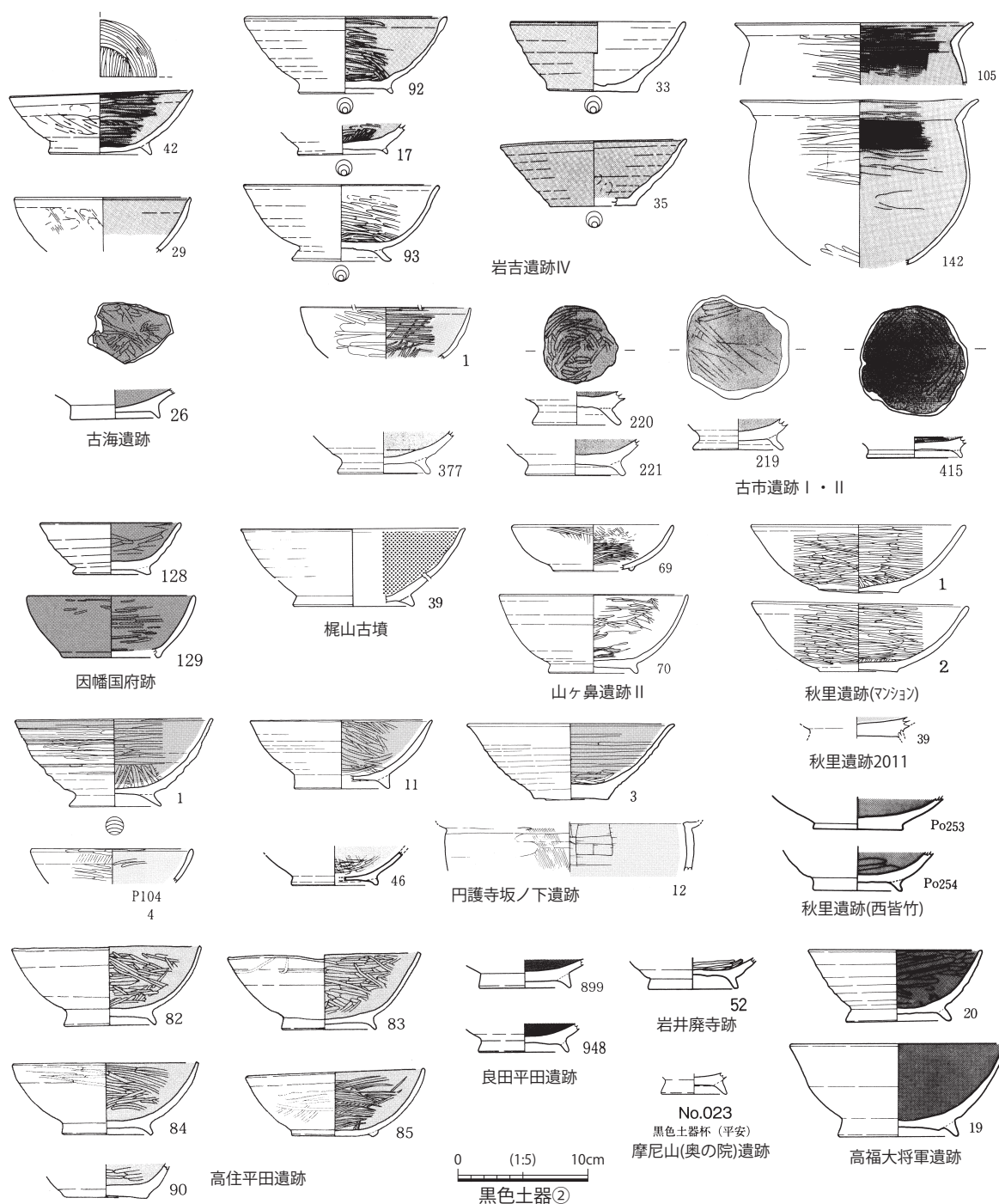


図3 黒色土器②

越州窯系青磁は中国産の磁器である。全国的にみても出土する遺跡や国衙や主要遺跡に限られる。因幡では国庁から出土する。因幡地域は日本海に面しているため、海路の可能性もあるが、防長産の緑釉陶器はほとんどみられない。多くは京都や近江、東海産であること、手づくね土師器や黒色土器が一定量出土することからみても、都や畿内周辺、瀬戸内などから持ち込まれたと考えるのが妥当であろう。

(6) 他地域産須恵器

因幡地域における須恵器生産は、八頭町の山田窯よりも須恵器窯は確認されていない。時期は

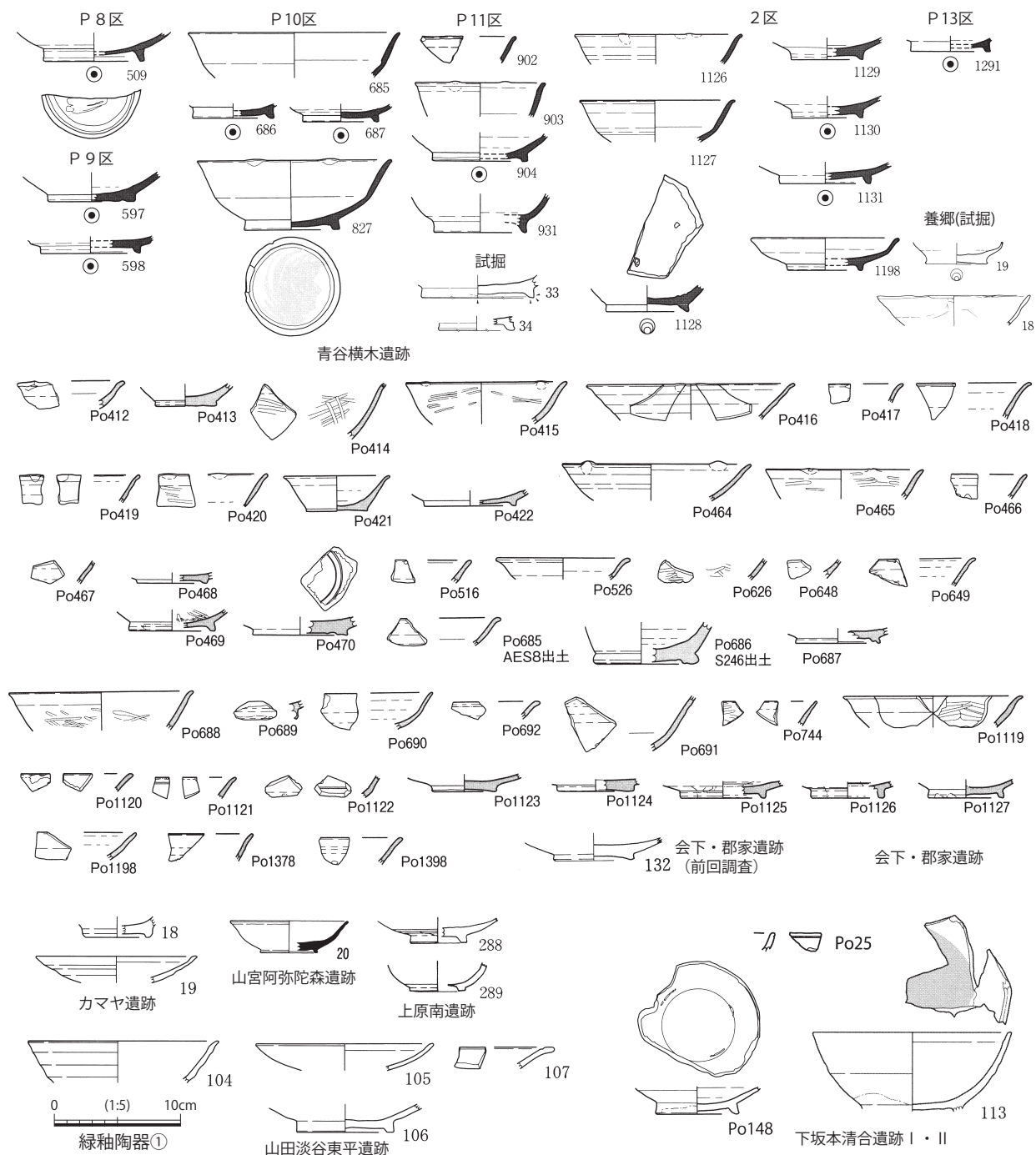


図4 緑釉陶器①

10世紀代と考えられる。器の形状は高台付きの坏や無高台の坏など、それまでの形状の延長上であり、平高台の椀や双耳の長頸壺など、他地域と同じ器形はない。同時期に須恵器生産が盛んに行われていたのは、周辺地域では中世の東播系の須恵器の一大生産地である播磨地域である。この須恵器をみると、椀は平高台や突帯をもつもの、壺は長胴で体部に2条の突帯と耳を有する特徴がある。生産地を特定するには科学的な胎土分析が必要ではあるが、形状などから播磨地域のものが主体のようである。ほか若干ではあるが勝間田周辺の器形とみられる浅椀や、産地は不明ながら体部を磨き調整する須恵器椀もある。

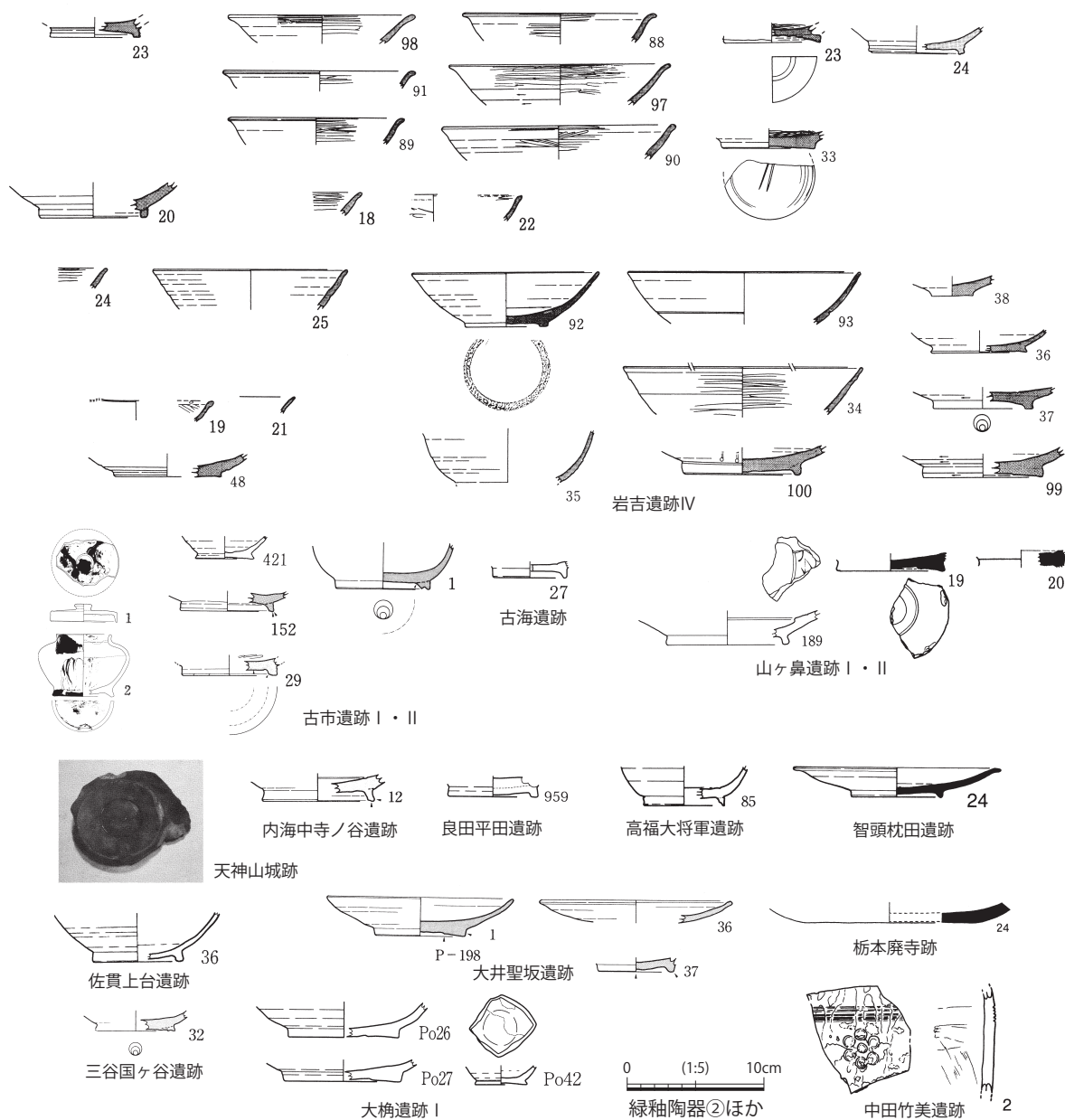


図5 緑釉陶器②

3 出土傾向

(1) 因幡地域の様相

因幡地域で搬入品が出土した遺跡をみると、国府から東側は少なく、西側や南側に多い。このことから国府から東へ向かう古代山陰道よりも、南に向かう古代因幡道を通じて活発に土器や陶磁器が移動していたことがうかがえる。気多郡や高草郡の湖山池南側から青谷にかけて、青谷横木遺跡や会下・郡家遺跡など、より海沿いの遺跡から出土する。古代の段階では海岸線がより内陸に入り込んでいたため、陸路と海路はより近似した位置を通る。高住平田遺跡や秋里遺跡のように港の機能が推測されている遺跡もある。これはどちらかのルートが断絶しても、途切れさせることなく移動を確保するための基本的な考え方であると理解したい。同じ視点からみれば、都から因幡まで安定した物の移動や情報を共有するためには、古代山陰道のみでは十分とはいえない。そのため古代

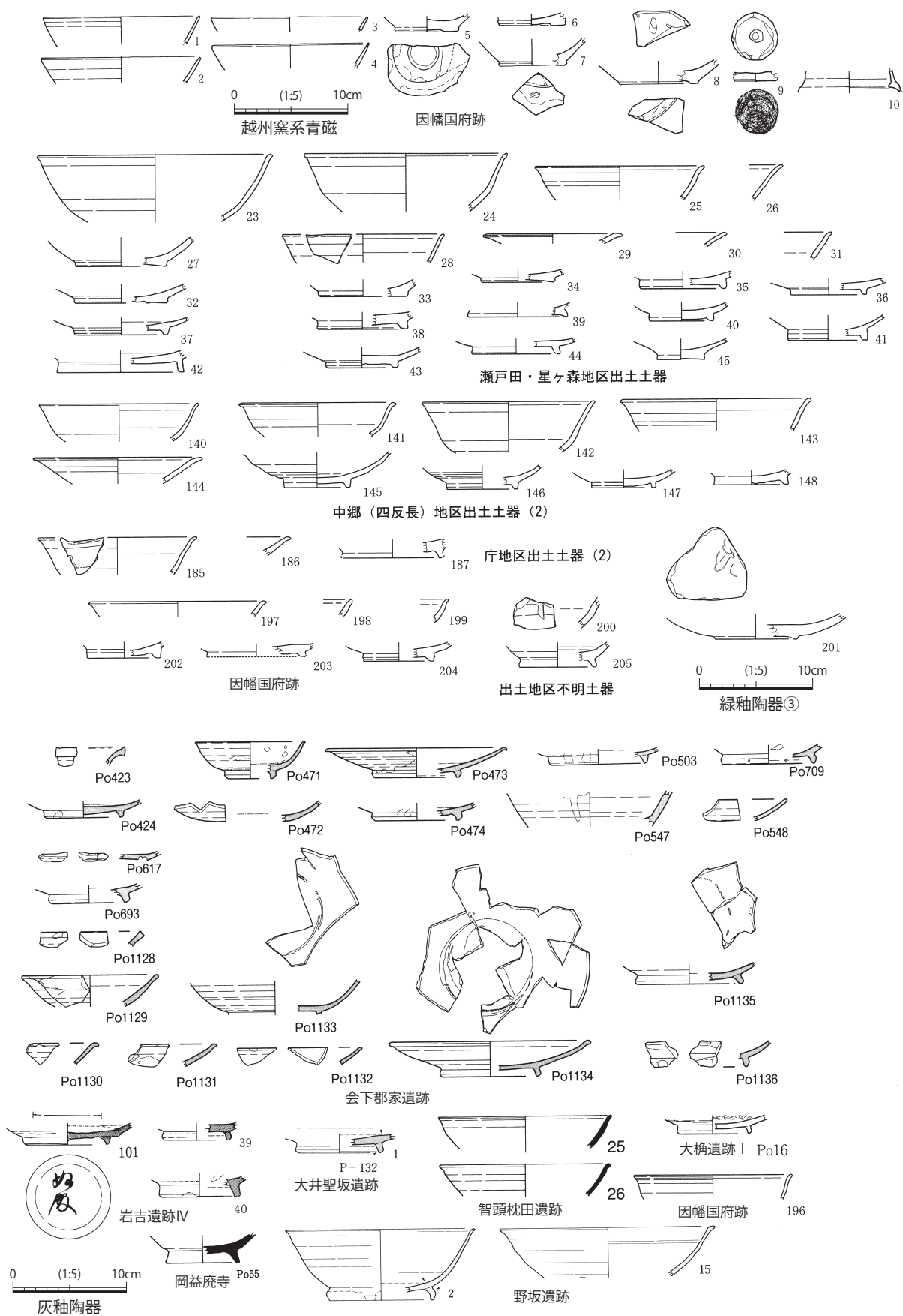


図6 緑釉陶器③・灰釉陶器

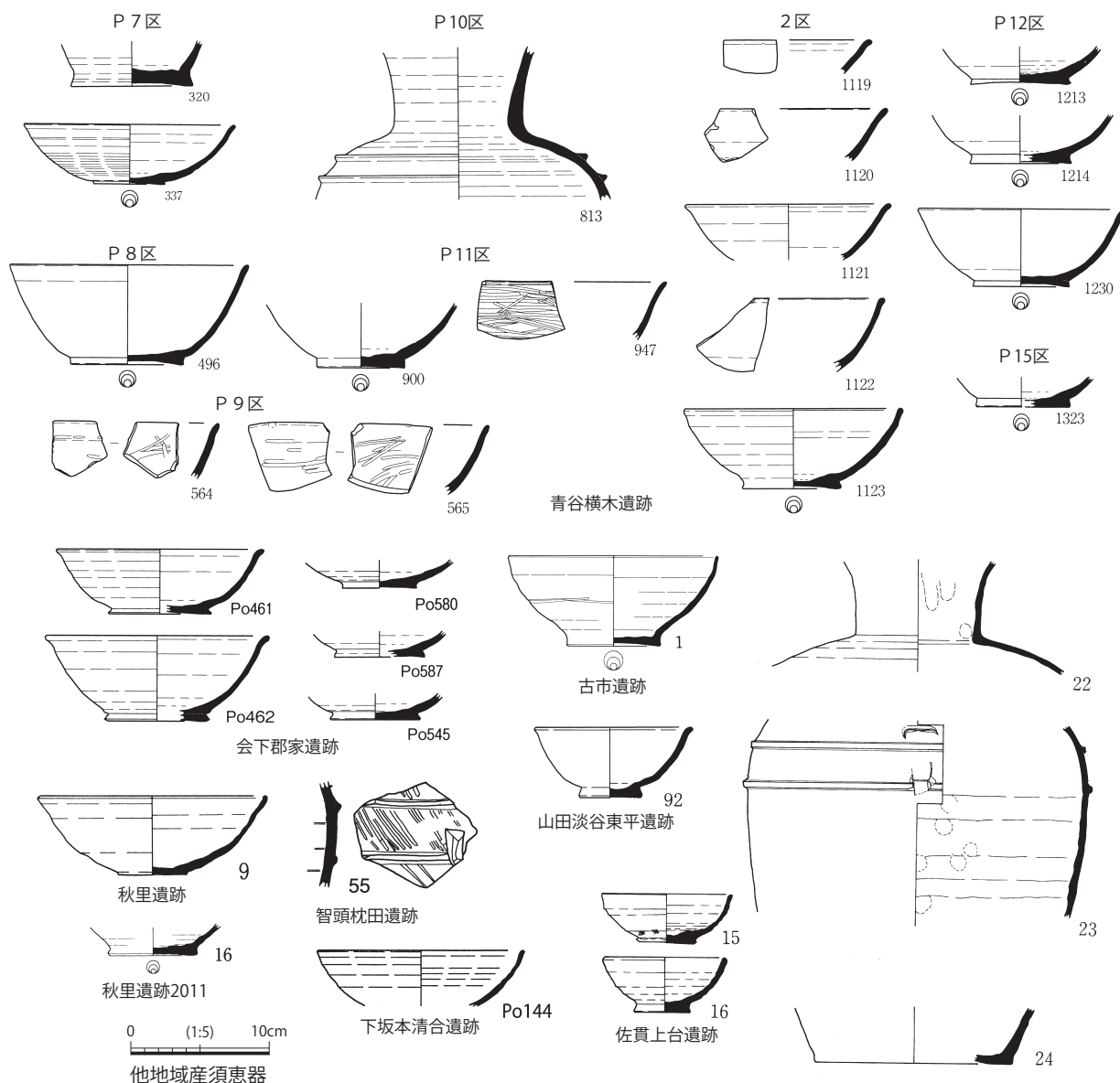


図7 他地域産の須恵器

因幡道のように正規でなくとも事実上の主要な道として併用されたと考えることもできる。

(2) 青谷横木遺跡の傾向

搬入された土器や陶器が、青谷横木遺跡ではどのように出土するのか検討する。表1は出土土器・陶磁器全点をカウントしたもので、実測・掲載したものも含む。

P 10区とP 11区では道沿いに柳の株が検出され、その範囲はP 9区からP 12区に及ぶとみられる。この柳は街路樹として植えられ、併行する丘陵沿いには主要な施設が想定されている。また年代を記す題箋軸をみると、57号木簡に「天慶十(947)年」、市2号木簡には「天曆元(947)年」と同じ年の題箋軸がほぼ同じP 11区周辺で出土している。題箋軸の性格から、10世紀半ばに重要な文書を管理する施設が存在したこと、元号の変化にも随時対応していることが分かる。P 9区からP 12区から出土した搬入品をみると、この範囲では手づくね土師器、黒色土器、緑釉陶器、他地域産の須恵器いずれも他の地区よりも特に多い。中でも緑釉陶器はP 10区・2区・P 11区に

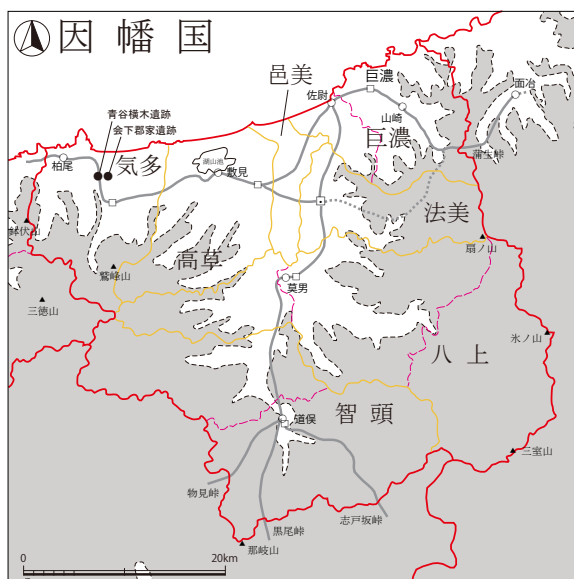


図8 手づくね土師器出土遺跡

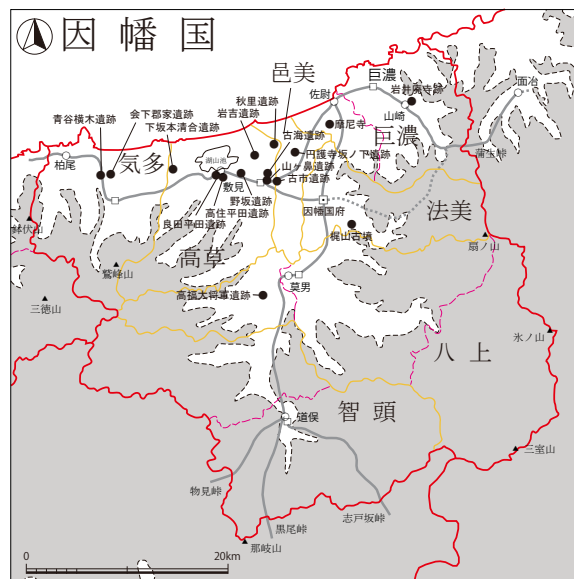


図9 黒色土器出土遺跡

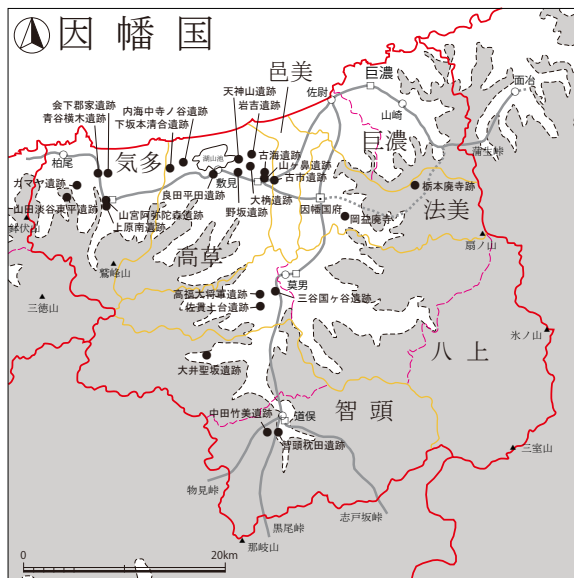


図10 施釉陶器出土遺跡

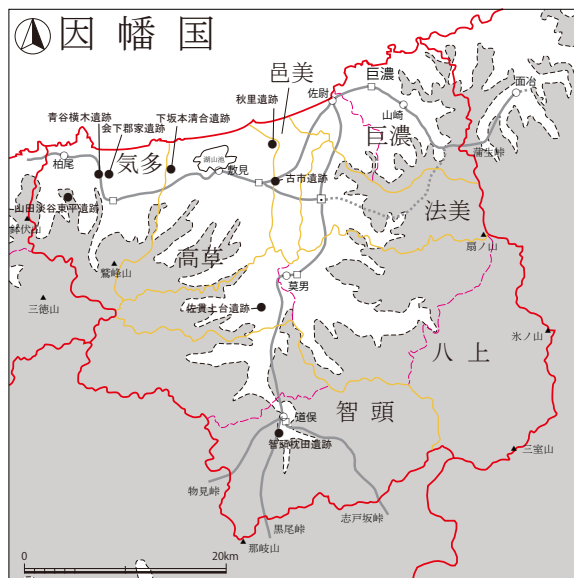


図11 他地域産の須恵器出土遺跡

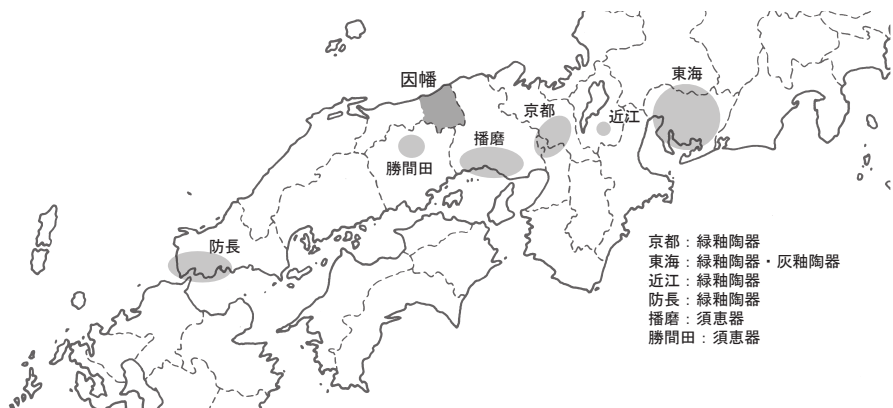


図12 須恵器・陶器の生産地

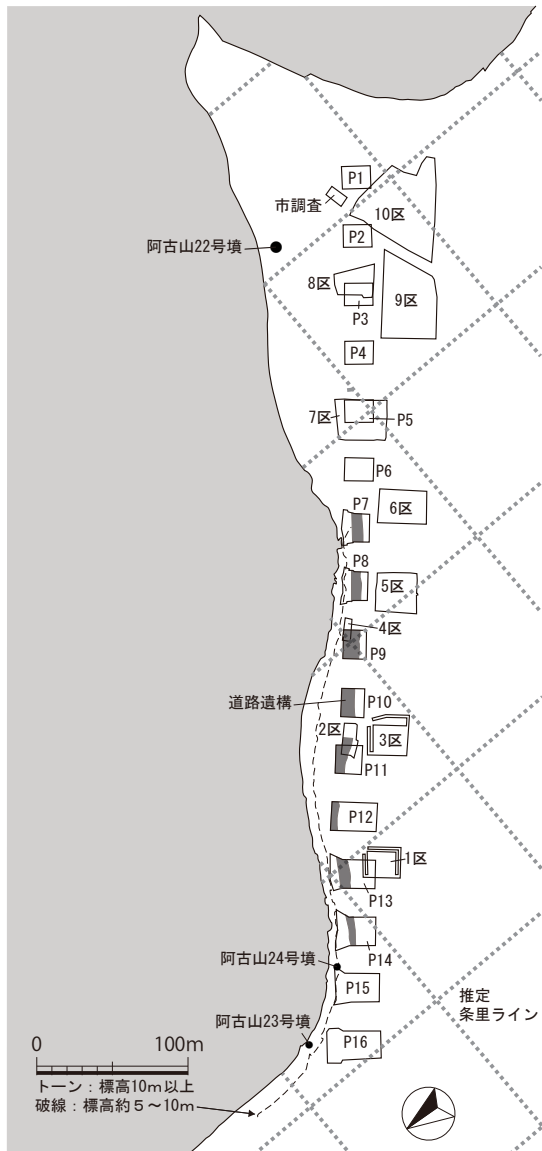


図13 青谷横木遺跡周辺略図

表1 青谷横木遺跡の出土遺物点数（報告書掲載外含む）

	手づくね	黒色土器	緑釉陶器	他須恵	輪状	宝珠他
市調査			2			
P1		3	1		14	32
10区					3	3
P3				1		
P4					1	
P5						1
P6						1
P7		12		6	15	4
P8	2	13	1	4	1	0
P9		17	8	6	17	3
P10	12	10	14	12	42	23
2区		4	16	10		
P11	18	35	27	5	38	1
P12		19	2	6	13	1
P13			2		13	3
P14		9			6	1
P15				2	1	1
P16						1

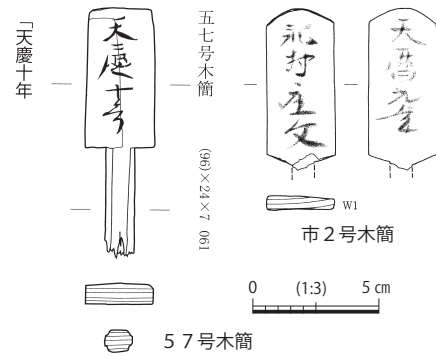


図14 青谷横木遺跡出土の題箋軸

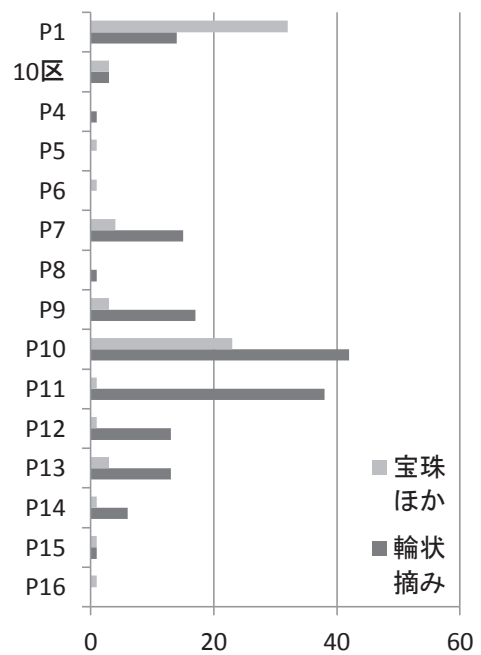
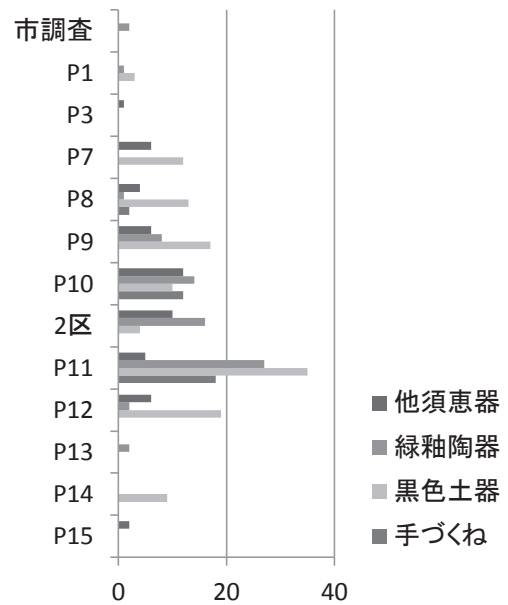


図15 表1のグラフ（青谷横木遺跡）

集中し、多くが 10 世紀前半の所産である。ただし、11 世紀後半以降、日本に大量にもたらされた白磁の出土が無いため、青谷横木遺跡の下限は 11 世紀までとなる。

次に主要な施設の成立と経過を確認するため、須恵器の蓋に付く輪状のつまみと宝珠やボタン状のつまみの点数を集計した。大まかではあるが輪状のつまみは出雲地域では 7 世紀後葉から 8 世紀前葉に生産される。宝珠やボタン状のつまみは概ねそれ以降、全国的につまみの消失する 9 世紀前半まで出土する。P 9 区から P 12 区までの範囲では 8 世紀前葉までの輪状のつまみは多数出土するが、その後は P 10 区以外は激減する。これは主要な施設が奈良時代後半には P 10 区周辺を除いて衰退するものの、10 世紀以降には道路遺構の修復とともに大規模に整備されたことを示す。

もう一箇所、東側の P 1 区・市調査地周辺であるが、ここからも黒色土器・緑釉陶器が出土するほか、輪状のつまみや宝珠・ボタン状のつまみが調査区全体の中で最も多く出土する。これは西側の主要な施設の衰退期にあたる 8 世紀後半から 9 世紀の間も維持されていたことを示す。一つの考え方として、主要な施設が一時的に機能を東側に移したのかもしれない。

この P 1 区周辺は、東端にあたる箇所は北東から南西に下る小扇状の地形で、P 9 区～P 12 区の急傾斜地際とは異なり、崖が崩落する危険も少なく、一定の広さを確保できる。さらに P 1 区では須恵器の甕片が多量に出土していることから、主要施設のほか貯蔵施設を併設していたことも推測できる。

おわりに

今回の発表は 2 年計画のうち 1 回目の経過報告である。主に平安時代後期について、因幡地域の手づくね土師器、黒色土器、施釉陶器、他地域産の須恵器を集成し、青谷横木遺跡については立地と出土遺物からみた湯様な施設の位置を推測した。

次回は須恵器生産について、胎土分析を中心に在地の須恵器がどの範囲で使われていたのか、窯跡出土の須恵器と消費遺跡で出土した須恵器から、在地の土器生産と移動について検討する予定である。

表2 各遺跡出土点数

遺跡名	旧市町村	手づ くね	黒色 土器	緑釉陶 器ほか	灰釉 陶器	他地域 須恵器	備考 ※点数は報告書掲載のみ
岩吉遺跡	鳥取市		9	27	3		鳥取市教育福祉振興会 1997
古海遺跡	鳥取市		1	1			県史編さん室 2018
古市遺跡	鳥取市		6	4, 三彩 2		1	鳥取市教育福祉振興会 1998・1999
山ヶ鼻遺跡	鳥取市		2	3			鳥取市教育福祉振興会 1998・1999
大桝遺跡	鳥取市			3		1	鳥取県教育文化財団 2017
秋里遺跡	鳥取市		3			2	鳥取県教育文化財団 1990 鳥取市教育福祉振興会 1996・1996
円護寺坂ノ下遺跡	鳥取市		6				鳥取市教育福祉振興会 2000
野坂遺跡	鳥取市						鳥取市教育委員会 2000 鳥取市文化財団 2006
高住平田遺跡	鳥取市		5				鳥取県教育委員会 2012
良田平田遺跡	鳥取市		2	1			鳥取県教育委員会 2014
内海中寺ノ谷遺跡	鳥取市			1			鳥取市文化財団 2005
天神山遺跡	鳥取市			1			鳥取県教育委員会 1973
摩尼寺奥の院遺跡	鳥取市		1				鳥取環境大学浅川研究室 2012
岩井廃寺跡	岩美町		1				岩美町教育委員会 1986
因幡国府跡	旧国府町		2	44, 越州 系 10	1		八峠 2002『貿易陶磁研究』No. 22 県史編さん室 2018
岡益廃寺	旧国府町				1		鳥取県埋蔵文化財センター 2000
梶山古墳	旧国府町		1				鳥取県教育委員会 1979
栃本廃寺跡	旧国府町			1			鳥取市教育委員会 2008
大井聖坂遺跡	旧佐治町			3	1		鳥取市文化財団 2005
高福大將軍遺跡	旧河原町		2	1			鳥取県教育文化財団 2002
佐貫上台遺跡	旧河原町			1		5	鳥取県教育文化財団 2000
三谷国ヶ谷遺跡	旧河原町			1			鳥取市文化財団 2008
智頭枕田遺跡	智頭町			1	2	1	智頭町教育委員会 2006
中田竹美遺跡	智頭町			1			智頭町教育委員会 2004
下坂本清合遺跡	旧気高町		3	3		1	鳥取県教育委員会 2016・2017
山宮阿弥陀森遺跡	旧気高町			1			気高町教育委員会 1986
上原南遺跡	旧気高町			2			気高町教育委員会 1988
会下・郡家遺跡	旧気高町	3	19	45	21	5	気高町教育委員会 1982 鳥取県埋蔵文化財センター 2018
青谷横木遺跡	旧青谷町	11	11	23		17	鳥取市教育委員会 2013(養郷所在) 鳥取市文化財団 2015 鳥取県埋蔵文化財センター 2018
カマヤ遺跡	旧青谷町			2			県史編さん室 2018
山田淡谷東平遺跡	旧青谷町			4		1	県史編さん室 2018

※ 青谷横木遺跡は試掘の際には、養郷所在遺跡とされる。出土点数は表1に入れていない。